

第一

人種改良のことに就ては、内外離婚の工風等、我輩の常に賛成する所にして、諸方よりの寄書も少なからず、毎度我時事新報に掲載したるものあり。抑もこの事たる、容易に着手して容易に成績を見るべき事柄に非ず、所謂一国百年の謀なるが故に、成功の遲速を問わず、苟も之を助くべき方便あれば、之を求めて利害を考究せざるべからず。依て案ずるに、離婚は外より異種の男女を入るゝの工風にして、固より奨励すべきものなれば、之を他力の改良法として、爰に又自力の法も等閑にすべからず。即ち内の男女の體質を改良して完全なる子孫を求むるの法なり。今之を講ずるに、その法甚少からず。或は食物衣服〔の欠典〕を補うの法あり、或は治病摂生（普通に摂生と唱うるものを云う）に注意するの要あり、何れも皆人種改良に大切な事項にして実益あるべきは疑を容れざる所なれども、この衣食、治病摂生の事項に拘らず、我輩の所見にて凡俗世人の常に等閑に附するのみならず、上流の学者社会に於ても軽々看過する所のものあれば、本論に於ては尋常の治病論又摂生論を離れて、女性の知識快樂の働を説明し、之を發達せしめて以てその体力の欠を挽回するの工風を陳べんとす。而してその立論の目的は徹頭徹尾、形体の改良に在るものなれば、快樂の事を説くに当り、時としては唯その

肉体の獸類に属する部分のみを推究して、恰も人生を獸類と同一視するものがあるが故に、行文中、或は道德世教の爲めには如何しく見えて、浅見小量なる徳義論者の思う所に戻る箇条もあらんと雖も、精神論と形体論とは全く各別のものなるが故に、看客に於てもその辺は特に注意して、本論の趣旨を誤るなからんこと、記者の願う所なり。

扱我輩が自力に依て人種改良を行わんとするは、先ず日本国の婦人の心を活潑にして、随てその身体を強壯にし以て好子孫を求めんと欲するの工風なり。近年我国に於ても婦人論は少からず、その論点は何れも皆婦人の無学無識を憂いてその欠点を補わんとするものにして、或は讀書技芸を教えて精神を研ぎ、或は運動の法を授けて形体を養い、以てその身心の発達を期するは、世上一般所謂文明者流の輿論なるが如し。然りと雖我輩の所見を以てすれば、この教育法は未だ以てその発達を促がすに足らざるものと云わざるを得ず。彼の儒教主義の余流を汲で組織したる女大学風の教育を以てし、益これを教えて益これを萎縮せしむるが如きは固より

- 1 内外雑婚 日本人と外国人が結婚すること。
 - 2 道德世教 社会道德。
 - 3 看客 読者。見る者。
 - 4 文明者流の輿論 西洋的な考え方。
 - 5 女大学風の教育 儒教的な封建道德にもとづく女子教育のこと。
- 『女大学』は江戸時代中期に成立した、女性向けの修身道德の教訓書。著者は不明だが、明治後期になっても貝原益軒著と考えられていた。江戸時代はもちろん明治以降、様々な版が繰り返し出版された。教育の普及とともに「女大学風の教育」は幅広い層に浸透していった。